

理事長所信

一般社団法人 ひたちなか青年会議所
第30代理事長立候補者
藤田 康広

「知行合一」

【はじめに】

私は今、理事長所信を書いている。
この文章が他の人の目に映る時、既に行為自体は完了し、
その成果が本書となるわけだが
少なくとも今は、まだ過程にある。

本来、理事長所信の冒頭は、一年で取り組むべき事業の背景を連ねるものであり
理事長就任への想いを強く語り出す場面なのだろう。

しかし私の中には、未だに迷いがある。
何故私が、理事長所信を書いているのだろうか。
JC活動の優先順位が決して高いとは言えない生活を送る自分が、
30周年の理事長という、重みのある立場を預かろうとしている。

当然、覚悟と責任を以って決めたことであるが
所信を描き終えるまでのこの迷いもまた、
伝えるべき想いではないかと感じ、最後の機会として記したいと思う。

何故、私たちはJC活動に取り組むのだろうか。

当たり前のことではなく、ましてや人に決められるものでもない。
自分の時間を、仕事の時間を、家族の時間を割いて
何故地域のために奉仕しようとするのだろうか。

一人ひとりが改めて考え直す機会となれば、
奇妙で風変わりなこの所信冒頭も報われるであろう。

【地域と共に歩んだ30周年】

1994年11月に、旧勝田市と旧那珂湊市が合併しひたちなか市が誕生しました。
私たち、JCI ひたちなかはそれに先んじて、社団法人那珂湊青年会議所と社団法人勝田青年会議所との社団法人合併を経て誕生し、1994年6月9日に設立総会を開催しました。

あれから30年が経ち、私たちの住み暮らす那珂大地は大きく変化しています。

直近の10年を振り返ると、自然災害や新型コロナウイルス感染症に悩まされ続けた期間でありました。東日本大震災の余震に何度も見舞われるなかで、新たに集中豪雨災害による被害も経験しました。2019年の台風19号による被害では、那珂市、ひたちなか市で堤防の決壊や越水被害等が発生しました。

2020年初頭からは、新型コロナウイルス感染症による影響がこの地域にも波及し、現在に至るまで続いています。

国内を見ても、噴火による被害や各地で頻発する甚大な地震被害、集中豪雨による洪水や土砂災害など、いっどこで自然災害に遭遇するか分からない、安全安心な暮らしが脅かされるように変化してしまっただけといえます。

そのような中でも、2017年にJCIひたちなかはひたちなか市、那珂市、東海村の各社会福祉協議会と災害協定を締結し、2019年の台風19号による被災地のボランティア活動に参加するなど、効果的な被災者支援活動を行うために行動してまいりました。

2020年には、新型コロナウイルス感染症対策として国から配布されたマスクを対象に、チャリティーマスク事業を自ら考え、実行してまいりました。

毎年のように私たちを取り巻く環境は変化しつづけた10年でありましたが、先輩諸氏はそれぞれの条件のもとで、自分たちにできること、今だからこそできることを仲間たちと共に考え、行動し、地域に貢献されてきました。

JCIひたちなかの記念すべき30周年に際し、これまでの歩みに敬意と感謝の意を表す記念事業を実施します。また、本年は先輩諸氏から受け継いできた想いや活動について改めて学び、そして次の世代と共に見つめ直す良いきっかけの時です。シニアクラブと連携し、メンバーがそれらに触れられる、共有できる機会を設けて次の世代へ引き継げるカタチづくりを目指します。

30周年を迎えられることの重みを噛み締め、JCIひたちなかの未来への想いを醸成し40周年に向けて引き継がれるビジョンや活動方針を構築、宣言しましょう。

【青少年育成・政策事業】

私たちが住み暮らすこの那珂大地が、これからも発展するために。

この地で活躍できる人材の育成は、私たちに求められる重要な役割です。

今、正に育っている若者たちが、この地により深い愛着を育むために、そしてこの地により豊かな人生設計を描けるために。

学校の垣根を越えて、若者達が地域について議論できる機会や、地域資源を掘り起こし働き方や生き方について考える機会を提供します。

この地により深い愛着を育むために、若者達が地域の課題を議論し、提言する機会を設けます。若者の発信する内容や行動は、地域の人々にとって関心が高く、強い影響力を有します。自然災害に対する備えや、SDGsなどの地域課題について、学校の垣根を越えて学生同士が議論し、知識を共有し、交流を深めたうえで、地域にとって必要とされる成果を公表する機会を設けます。

非常時への備えは常時に行うことが必要です。特に、原子力関連施設を抱える私たちの地域では、より特殊な対策が求められます。これまでの経験を活かし、次の災害に備え、若者達の提言により市民の災害意識向上の機会を創出します。

地域に影響を与える、必要とされる経験を積むことは、若者の地域への愛着を育むことにつながります。

2022 年度実施の那珂大地グローバル高校生コンテスト参加者を中心とした中学生と、ジュニアクラブによる学生組織を構成し、共に連携しながら運営します。このような企画運営は、学校では得られない貴重な学び、体験、交流の機会となり、将来的な地域活動のきっかけになることでしょう。

各地域の役所や議会、社会福祉協議会等とも連携し、JC だからこそできる機会の創出を図ります。

また、地域の若者がこの地でより豊かな人生設計を描けるようになるために、地域の学生たちを対象に、普段とは異なる視点や視野で地域に点在する施設、重要な役割を持った施設を体験、体感できる機会を設けます。

将来的に若者が戻って来られる地域づくりをテーマに、地域の人材確保に課題を持つ企業や団体と協働した事業内容を構築します。このような活動は、長期的な人材確保を求めている地域の企業や団体のニーズにも応えることができます。事業が更に発展するために、昨年度の成果をもって事前の広報活動を行い、感染症の影響で訪問が叶わなかった企業や団体と改めて連携を図り、より多くの学生がより多くの機会を得られるような仕組みを構築します。

JC という団体の持つ公共性を存分に発揮し、地元で働く人の生き方に触れられる機会を、若者に提供しましょう。

これらの青少年のための事業を構築、実施し、最終的には地域に向けて各事業に参画した若者が発表できる機会を創出します。地域に密着し、協働し、貢献することで、JCI ひたちなかはこれからも必要とされる組織となることを目指します。

【新陳代謝に応じた組織運営スタイルの確立】

前年度、9名のメンバーが卒業されました。

本年の JCI ひたちなかは、アカデミーメンバーが半数を大きく超えることとなります。

核家族化や晩婚化の進む現代社会において、一個人が社会活動に取り組む環境が整う時期は、より 40 歳に近づくことが懸念され、入会年齢の高齢化は今後も続くことが十分に予想されます。そのような今だからこそ、入会年数の長短に関わらず主体的に JC 活動に取り組めるようなしくみづくりが必要です。

持続可能な社会を実現するためには、私たち自身が持続可能な組織とならなければなりません。地域に前向きな変化を与えるためにも、私たち個人を取り巻く地域や仕事、家族などのジブンゴトをより一層安定させたものに改善する必要があります。

2007年に内閣府によって行動指針が策定されたワークライフバランス実現のための目標数値のうちの一つに、6歳未満の子どもをもつ夫の育児・家事関連時間は、一日あたり2時間30分とされています。2020年までの実現を目指して策定されましたが、子育て世代ど真ん中の私たちは、どこまで実現できているのでしょうか。

これからのJCIひたちなかは、多様な人材の活躍できる持続可能な団体となるために。運営方針として、各種会議の開始時間変更や、会議終了時間の設定、出席の定義見直し等を定め、またオンラインストレージサービス等を活用した効率的な組織運営方法を私たちに構築し、実行します。

私たちの仕事や家族もまた、貢献すべき地域社会の一部です。地域活動の為に犠牲になってよいものではありません。JAYCEEとしてこれまで継承してきた文化や事業を尊重しつつ、今だからこそ、私たちだからこそできるジブンJC活動を共に考え、実行しましょう。

【機会】

今日、こうして私がこの役職をお預かりすることになったのはJC活動の中で様々な機会に遭遇したからです。

尊敬できる人と出会い、事業を共に構築・実施し、組織の運営を共に行う中で尊い想いに触れる機会がありました。

ある時は、困難な状況と分かっているのに、想いを一つに組織が団結することの素晴らしさを感じる機会がありました。

また、日本各地で活躍する同世代と触れ合い、互いの夢や悩みを共感できる機会がありました。

JC活動は、日常では得られない機会に溢れています。

組織のしくみづくりに関するヒントも、出向から得ることができました。

自身を成長させられる機会を、より多くのメンバーが手にできるように。

活動を通して、困難を乗り越え、成長できる一歩をお手伝いします。

【結びに】

今日、理事長という立場をお預かりする機会に恵まれました。

30年続いてきた想いを繋ぐ大事な役割を、メンバーと共に全うします。

私だけではなく、メンバーが学んできた知識を以って

自分たちがすべきこと、やることを主体的に考え、行動します。

『知行合一』

積極的に学ぶ機会を得て、知識を共有し、共に実行に移す一年にしましょう。